

官邸崩壊

高嶋哲夫

第一回

プロローグ

気のせいか、部屋には重く^{よじ}澱んだ空気が溜まっていた。

エアコンと空気清浄機によって、ビル全体が人間にとって最適な環境に作り上げられているはずだ。

窓からは眼下に広がるネオンの原色の輝きが、どぎつい現代アートのように見える。

ニューヨークの中心に建つエンパイア・ホテル、最上階の部屋だった。

テーブルを囲んで、三人の男が座っていた。チェイス・ドナルドアメリカ合衆国大統領、ドミニク・アンダーソン国務長官、トーマス・ロビン首席補佐官だ。週末のホワイトハウスと呼ばれるこのホテルでの集まりは、大統領就任以来、すでに二年近く続いている。

ホワイトハウスでは話せない、プライベートな事項、政策の要となる事項が話されるのだ。ホテルの所有者はドナルド大統領だ。

「このレポートの出所はどこだ」

大統領は手に持っていたファイルテーブルに置いた。

「友人のMIT（マサチューセッツ工科大学）の教授が私に送ってきました。ネイチャーに投稿してきたものが、査読に回ってきたそうです」

ロビンが間髪を入れず答える。ロビンは石油会社の元会長で顔の広い男だ。

「では、まだ公にはなっていないのだな。書いたのは誰だ」

「ジェームズ・トマスという、アラスカ大学の教授です」

「彼は現在もアラスカに住んでいるのかね」

「先週、交通事故で死んでいます。一匹狼的な偏屈な科学者だったらしいです。専門はアラスカの地質学、共同研究者もいないようです」

「では、このレポートは、ごく一部の者しか知らないと考えていいのだな」

「おそろしく」

ロビンが額くうなずのを見て、大統領はファイルをもう一度手に取った。

『アラスカ州およびその周辺のシェールオイルとシェールガスの埋

蔵状況』と、長いタイトルが付けられたA4用紙二十枚ほどのレポートには、さらに十枚ほどの図表と写真が添付されている。

「信憑性はあるのか」

「事実の調査観測レポートです。導かれる結論は、科学者にとって

――」

「MITの教授はなんと言ってる」

大統領は補佐官の言葉を遮った。

「極めて憂慮されるべき状況だと。著者の結論は正しいと言っています。だから私に送ってきました」

「彼には掲載不可にするようメールを送ってくれ。理由は何とでも付くだろう。国益に反することも大きな理由だ。今後、このレポートについては他言無用だ。忘れるようにと。政府内でのしかるべきポストと、研究費の増額で納得するかね」

「すべて手配済みです」

ロビン補佐官の言葉に大統領は満足そうにうなずいた。

それまで無言だったアンダーソン国務長官が口を開きかけたが、そのまま何も言うことはなかった。

窓の外には緩やかな丘陵が続いている。

緑はなく、岩と砂の丘が連なり、斜面にはいたる所に掘り返され

たような大小の穴が目立つ。

その丘を黒い車両が走るのが小さく見える。進行方向に付いている砲塔から炎が見えた。戦車だ。かなりのスピードで走っている。

遠くで銃声が聞こえる。丘の向こうからか。三十平方キロと聞いている広大な敷地だ。丘の中ほどにはコンクリート製の二階建ての建物が二棟見える。目前に広がっているのは、砂漠に見立てた光景か。

窓際にまったく対照的な二人の男が立っていた。

一人は仕立てのいいスーツにネクタイ。薄く砂をかぶっている黒い革靴は見るからに高級そうだ。あか抜けた知的な顔、胸には星条旗のバッチを付けている。政府関係の男だ。

もう一人は迷彩めいさいの入った戦闘服すなはせりに腰には大型自動拳銃を吊るしていた。全身に砂埃をかぶり、ブーツには乾いた泥が付いている。陽に灼けた精悍せいかんな顔に引き締まった身体。手には葉巻を持っていた。

スーツの男が戦闘服の男に視線を向ける。男は葉巻の灰を足元に落として言った。

「確かに数千万ドルは手に入りそうだ。いや、それ以上か」

「我々は金には興味はない」

「だが、準備資金は必要だ。少なくとも百万ドル。安く見積もつての話だ」

「金は君たちで好きにしろ。私たちが払えるのは五十万ドルだ。それ以上は無理だ」

戦闘服の男は考え込んでいる。

窓ガラスが震え、轟音ごうおんが響いてくる。丘陵の何ヶ所かで土煙が上
がった。どこかで上に向かって砲撃をしている。

「事前準備をして、詳細な情報を与えるというのは事実なんだな」

「それは約束できる。手始めにこの中に官邸の図面と、総理の予定
が入っている」

スーツの男はデスクにフラッシュメモリーを置いた。

戦闘服の男はそれを見ながらしばらく考えていた。

「いいだろう。しかし、情報の正確さは確かなんだろうな」

「間違いない。すべて正確なものだ。日本の過激派と呼ばれるグル
ープから手に入れた。彼らは個人的には優秀だ。組織としては問題
だらけだが」

「実行となるとさらに多くの情報が必要になる。警備情報を含めて
だ」

「今、用意している。明日中には送ることができる。それよりも間
に合うのか。人員を選択し、装備を集める時間がある。それらを輸
送しなくてはならない」

「二週間後か。準備はいつだってできている」

男は自信を持った声で答えた。

「人員、武器と装備はそろえてある。輸送はそつちでやってくれるんだろ」

「外交官特権が使えるようにしてある。米軍基地から基地への輸送ルートも使用できる」

腹に響く砲弾の音が聞こえてくる。

スーツの男は窓に目を向けた。走っていた戦車が止まり、黒煙を上げている。ハッチを開けて、人が飛び出してくるのが見えた。

「対戦車砲が命中した。小火器から、戦車を一発で仕留めるミサイルも用意してある。地对空ミサイルまでなんでもありだ。撃つていくかね」

「結構だ。湾岸戦争で十分経験した」

スーツの男は再度、窓に目をやった。

戦車の黒煙が赤い炎に変わっている。近くの斜面で、時折り砂埃が上がった。

「しかし、なぜ日本の総理官邸なんかを——」

戦闘服の男が呟くように言った。

明日香あすかは男の頭めがけて足を蹴り上げた。

つま先は空を切り、その足をつかまれ、思い切り関節をひねられ

る。

痛さと骨折を避けるために、ひねられた方向に身体を一回転した。

その拍子に、ひょうし両腕をつかまれ身体を床に叩きつけられる。衝撃が全身に広がり、息ができない。

「これじゃ、とても〈クイーン〉を護り切れない」

〈クイーン〉は新崎百合子総理を指す貼付だ。ちようふ明日香は先月まで、

〈サクラジマ〉に付いていた。鹿児島県出身の女性大臣だ。

身長一九〇センチ近くある大男は、転がったままの明日香の背中を蹴った。

力加減はしているのだろうが、激痛が全身に広がる。思わず顔をしかめた。うめ呻き声を上げると更なる蹴りが待っている。こんなとき、警備はやはり男の世界なのかと思うことがある。同時に、負けるものかと、対抗心も燃え上がってくる。

明日香は痛みをこらえて立ち上がって、攻撃の構えを取った。

「おまえは戦おうと思うな。最初の一撃から〈クイーン〉を護るこ
とだけを考えろ。そのためには自分が犠牲になってもいいと、常に
自分に言い聞かせる」

盾になれ。つまり死ぬということだ。大男は言い残すとすでに背中を向けている。

背中に蹴りを入れようかとも思ったが、今度は骨を折られるか、

関節を外されると考え、思いとどまった。

男は高見沢、明日香の上司で、男尊女卑を固めたような男だ。明日香、というより女性を警護課から追い出そうとしているのか、と思うことがある。実際、明日香をクイーンの弾除け、と呼んだこともあった。

そのとき、中年のスーツ姿の男が明日香に近寄ってきた。

「警視が呼んでいます。すぐに部屋に行ってください。着替えなくても大丈夫です」

丁寧な口調で言うと、そのままドアの方に帰っていく。

明日香はスーツの男に目を向けたまま手の甲で額の汗をぬぐった。

筒井信雄はバンのスピードを落とした。

首相官邸、西門前のゲートを通りすぎていく。ゲートの横にはダークブルーの機動隊の大型輸送車が停めてある。一台は窓に金網のついた隊員輸送車。もう一台は窓も金属板で覆われた大型指揮車だ。

官邸に入るのは今回が三度目だ。慣れてもいいはずだが、やはり動悸が激しくなっている。

この顔で弟の前を通ったことがあるが、気が付かなかった。

体重を八キロ増やし、奥歯を二本抜いた。髪型を変えて茶色に染

め、メガネは黒縁で大きめのものをかけている。顔つき、体形は完全に変わっているはずだ。後は指紋とDNAだが、これはどうにもならない。弟が気付かずに通りすぎたときには、さすがに少し悲しかった。しかし、そうなった責任はすべて自分にある。

大学時代に過激派と呼ばれる時代遅れの組織に何気なく入り、気が付くと抜けられなくなっていた。いくつかの左翼運動に関わり、全国指名手配犯となって三年がすぎている。罪状には暴行、恐喝、殺人未遂まである。

大学も中退し、気が付けば三十代後半になっていた。新しい生活を始めるには外国にでも行くほかない。そのためには、まとまった金が必要。

助手席と荷台の男たちは警察にマークはされていない。思想性などみじんもない金目的のチンピラだが、今の自分とどれほどの差があるというのだ。新しい日本を創る。夢のようなことを信じていたのは遥か昔だ。

現在は逃げるのに疲れ、分け前の金額に惹かれ飛びついたのだ。しかし、あのアメリカ人は自分のことを熟知していた。公安のコンピュータにハッキングして資料を盗んだのか。

筒井が通行証を見せると、警務官はいつも通り、義務的に顔と見比べるだけで通ることができた。

今の与党とは政権が変わった時期があるが、当時の政権が通行証を乱発した。仲間の者が清掃業者として登録して、数年間、官邸の清掃をやった。そのときに数百枚の写真を撮り、正確な図面を作っている。さすがに地下階は一般の清掃業者は入れなかった。そこには危機管理センターや官邸内の集中管理室が置かれている。

その他の情報は当時の与党の国会議員から手に入れた。議員は官邸内の写真を撮りまくり、その詳細を喜々^{さき}として自身のブログに載せていた。さすがに議員を落選してからは削除していた。彼は現在、不動産会社に就職している。筒井は消される前にコピーしていた。

さらに筒井は一年前、仲間と設計事務所のパソコンをハッキングした。総理官邸を設計した設計事務所だ。

そこで数十枚に及ぶ図面を手に入れた。多少の改良は加えられていたが、写真とほぼ同じだった。

それを使う機会はなかったが、思わぬところで役に立つことになった。

筒井は一週間かけて詳細に記憶した。いま、その図面を頭の中に浮かべている。

バンは官邸の敷地に入っていった。

食堂のある裏口に車を止めて、積んである荷物を下ろした。

段ボール箱が七箱。数日前、その中身を見たときには腰を抜き

そうになった。拳銃と短機関銃など数十丁の銃器と弾丸が詰まっていたのだ。

他の箱には手榴弾や爆薬らしきものも入っていた。大型ケースはおそらくミサイルの部類だろう。

それらは二十近くの包みに分けられ、食材の箱に入れられて官邸の厨房ちゅうぼうに運び込まれている。ある物は大型冷凍庫に肉の箱と一緒に、ある物は野菜の箱と共に壁際に積まれている。

筒井はそれらを三日かけて運び込んだ。

現在、総理官邸の厨房の食材庫と掃除道具を入れた小部屋は武器で溢れている。

計画決行日は明日の夜だ。

第一章 襲撃

1

明日香は一瞬、目を閉じた。思わず横の警護官を見たが、彼は気づいてはいない。高見沢でなくてよかった。彼は見逃さない。

油断とも言えない一瞬が一生の後悔を生む。高見沢から散々聞かされてきた言葉だ。

広くとられている窓からは赤みを帯びた陽光が差し込んでくる。

中庭の竹が光の一部を遮り、チラチラとした光が目に入ったのだ。

総理官邸、三階にあるエントランスホールだった。官邸の敷地は東から西に向かって傾斜があるので、東側の入口は三階になる。

四階にある閣議室から閣議を終えて、総理一行が降りてきたところだった。今日はこれから、二階にある中ホールでの晩餐会ばんさんかいに出席する。

明日香は前方の記者たちに注意を向けながら、さりげなく歩みを遅らせた。

〈クイーン〉の横に付いて、記者たちの行動をより詳細に把握はあくするためだ。そして万が一の時には、いつでも〈クイーン〉と記者の間に立てる位置にだ。

「こんにちは、皆さん。今日は、新しいことは何もないわよ」

新崎百合子、内閣総理大臣は、居並ぶ記者たちに笑顔を向けて手を振った。

二ヶ月前、日本初の女性総理大臣が誕生した。支持率八三パーセント。国民の支持と期待で新崎総理自身も張り切って、次々と新しい政策を出していた。

「熱烈な支持者が多いということは、熱烈な非支持者も多いということだ」

明日香の直属の上司に当たる高見沢毅たけしが言った言葉だ。彼は警視庁警護課の警部補、四十二歳のベテラン警護官で三代にわたる総理の身边警護に付いている。失敗は一度も聞いていない。その高見沢は明日香の後方において、全体を見渡している。

ぶら下がりの会見は閣議の後、総理がエントランスホールを通るときにほぼ毎日行われる。

明日香は記者たちに目をやった。いつもは二十人近くの記者と数台のテレビカメラが総理を追っている。今日は若干多じやっかんいようだ。

「アメリカでは、とくにテロの対象になってるね。この警備状況では」

この状況を見たアメリカ人記者は大げさなジェスチャーを交えて言った。アメリカやEU諸国では、いくら公邸内とはいえ、こういうオープンな取材は考えられないと聞いたことがある。

官邸内部に入ることができるのは、通常、政治家か職員に限られている。

マスコミ関係者は首相官邸常駐の記者のみとされ、記者証が発行されている。記者クラブに属していたとしても、この官邸記者証がなければ面倒な手順が必要になる。

その他に、食堂や清掃などの従業員も通行証が発行され、それさえ見せれば比較的簡単に入ることができる。

夏目明日香^{なつめ}は先月二十七歳の誕生日を迎えた警視庁警護課の巡查長だ。

女性総理が誕生したため、急きよ通常警護官に加え、女性警官がSPに付くことになった。成績トップクラスの者ということで明日香が選ばれた。成績はいいが実績はなし。高見沢に言わせれば、ただの勉強家。実績、自信、実力はないが向上心はあると自分では言い切る。総理からは妙に好かれている。そういうところも高見沢は気に食わない。個人的な感情が混ざれば、冷静な警備ができないからだ。

初めての総理付きの本格的な女性SP（セキュリティポリス）ということで、一部の週刊誌で話題になった。しかし、役職柄広く公開するのをさけるといふ、警視庁と官邸の強い意向で取材は自粛^{じしゆく}された経緯がある。

新崎総理は階段を降りて、二階にある中ホールに向かった。

今夜はアメリカ合衆国国務長官ドミニク・アンダーソンを招待して、簡単な夕食会が開かれる。国務長官は、中国、韓国で国家主席と大統領に会い、帰りに日本に寄った。会談の主な目的は、急速に

不安定さを増している朝鮮半島の安定維持と世界で頻発するテロ対策だと聞いている。

アメリカの国務長官は、日本でいえば外務大臣に相当する。ただし他国の外務大臣に比べて強い権限を持っており、通商政策なども総括する。

大統領の継承順位は上院議長でもある副大統領、下院議長、上院議長代行に次ぐ第四位となっている。だが実質上、行政府のナンバー2であり政権の要といえる存在だ。

大統領三年目でその政策の意外性により、依然世界を騒がせているチェイス・ドナルド大統領について、新崎はもっと知っておきたいという本音があった。夕食の間に少しでも聞き出せればいい。

総理官邸の住所は、東京都千代田区永田町二丁目。国会議事堂の正面から南西へ徒歩で一キロほど回り込んだ場所にある。

二〇〇二年、旧官邸から機能が移された。総工費七百億円、地上五階、地下一階の鉄骨鉄筋コンクリート構造の建物だ。

設計を担当したのは旧建設省の官庁営繕部だが、えいせんぶ実際には有名建築家を集めた有識者会議がひらかれ、民間の設計会社が実質的な設計を行った。

ホワイトハウスやクレムリン宮殿など、世界の政府トップが執務

を行う建物は、多くが左右対称につくられている。シンメトリーであることが権威をあらわすという考え方だ。しかし日本建築の特質は左右非対称であり、総理官邸も非対称であるだけでなく、ガラスの中に木の格子を見せるなど和の要素が多く取り入れることで独特の品位と優雅さを表現している。

屋上は平らでヘリポートの他、中央部に開閉式の天井があり、真下が中庭になっている。屋上の半分は太陽電池のパネルがしきつめである。

同じ敷地内に首相公邸、官房長官公邸、内閣宿舍などもあり、敷地全体が高さ五メートル以上のコンクリート製防護壁で囲まれている。

この壁のまわりには田園の小川を思わせる水溝もつくられ、日本的な風景をイメージさせながら人の接近をはばむ堀の役割もはたす。官邸内部は警視庁総理大臣官邸警備隊が警備を行っている。

敷地周辺は警視庁機動隊の九つの大隊が持ち回りで警備を担当し、道路を封鎖して、一般車両の通行を規制している。

官邸の主たる内閣総理大臣は通常四人の警護官が護り、新崎の場合は女性であることを考慮して明日香が配属された。明日香であれば化粧室にも同行できる。

午後七時。

中ホールで夕食会が始まった。静かな音楽と品のいい日本料理と会話。

今日の主賓しゅひんはアメリカ合衆国務長官、ドミニク・アンダーソンだ。警護官は五人と聞いている。通常はもつと少ないが、世界情勢と訪問国に合わせてその数は決められる。

現在のアメリカ大統領は敵が多い。重要閣僚の国務長官にも必然的に敵対する組織や者は多くなる。今回は中国、韓国で首脳に会うということ警護官の数も多い。

アンダーソン国務長官は、現在のドナルド大統領の政権の中でも常識派の要と見られ、世界からの期待も大きい。

明日香は新崎総理の背後の壁際に立って会場を見回していた。

「席を外していいぞ。今のうちに何か食ってこい。顔が死んでる」
近付いてきた高見沢が小声で囁くささやく。今日は午前中から総理は官邸外での行動が多く、その間ずっと飲まず食わずで付き添っていたのだ。

明日香は軽く会釈えしやくをして宴会場を出た。

洗面所に行つて鏡を見た。二十七歳の女性にしては疲れた顔だ。

これでは高見沢に死人と言われても仕方がない。

朝の七時から十二時間以上、新崎総理の警護をしている。一時も

気を抜けない仕事だ。今日でちょうど二ヶ月目なのを思い出した。初めの二週間はマンションに帰ってから緊張が続いて、眠れなかった。今でもちよつとした物音で飛び起きる。

明日香はハンカチを出して化粧を直そうとしたが、無理な行為だ。

二ヶ月前、日本で初めての女性総理大臣が誕生した。

総理の警護体制は前後に二人ずつ、通常四人で行われる。総理公邸を出たときから帰るまでの間、この態勢が続く。

警護官になって半年目の明日香が急遽、総理大臣付きの警護官の一人となった。異例の抜擢ばつてきと言えるが、通常の四人体制プラス一人の警護態勢だ。

「トイレや着替えだけはおまえじゃないとな。しかし——」と言うのが警備主任高見沢の口癖だ。ミスがあればいつでも代えてやるという意思が見え見えな言い方だ。

中ホールからはかすかに音楽が聞こえてくる。

官邸内の警備は通常、官邸警務官が行っている。しかし、彼らはあくまで官邸の職員なので武器は携行けいこうできない。

その他に官邸の警備は警視庁の官邸警備隊が行っている。こちらは銃を携行し、官邸の周辺警備が主になる。

一般に、官邸の内外で目にする警察官はこの「警視庁総理大臣官邸警備隊」だ。警棒よりも長い警杖けいじょうを持ち、機動隊とともに官邸を

守っている。総勢百名ほどが配置されていて、官邸前の道路に移動式の金属バリケードを設置するなどしている。拳銃以外の銃器は近くの特殊車両に装備してあるが、その種別については極秘事項だ。人の気配でふり返った。右手は無意識のうちに上着の下の拳銃を握っている。

明日香よりわずかに長身の金髪の女性が立っていた。

「あなた、肌はきれいだけど化粧はへたね。汗で剥^はげている」

女性が英語で話しかけてくる。

「色々、気を遣うことが多くて。練習してる時間はないの」

「ハンカチ一枚じゃどうしようもないでしょ。ちよっと待って」

女性がバッグから自分のファンデーションを出して、手際よく明日香の化粧を直した。

明日香を鏡に向かせ、微笑んだ。

「もっと笑顔を。あなたには必要よ。若くて綺麗なSPなんだから」

「ありがとう。ミズ・スーザン・ハザウェイ」

女性は驚いた表情で明日香を見ている。

國務長官が到着した時に提出されたアメリカ側の随行員、三十二名の中にスーザンの資料もあった。

「アンダーソン國務長官について来てるワシントン・ポストの記者でしょ。私は夏目明日香」

「あなたは新崎総理の警護官。名前までは知らなかったけど。大変な仕事よね。化粧を直す時間もない、化粧ポーチも持てない」

「まだ新米だけ。いつも先輩に怒鳴られてる」

「英語すごく上手いわね。私は日本語ダメだけど」

「でも、SPは口や頭より身体で反応しろ。先輩の口癖」

「語学だって大切。特にトップのSPはね。きつと役に立つ」

「そうだいいけど。あと一日だけどよろしくね」

明日香はスーザンに手を出した。スーザンがその手を握る。

国務長官一行は明日の朝にはアメリカに発つ。中国と韓国では、なにか成果が残せたのだろうか。

音楽の中に人の声が混ざった。かなり大きな英語の声だ。続いて銃声が聞こえ始めた。拳銃と短機関銃の射撃音だ。

明日香の身体が反射的に動いた。ドアの前に移動した明日香の手には拳銃が握られている。

何かが倒れる音がした。同時に女性の悲鳴が響く。

洗面所から飛び出そうとしたスーザンの腕を明日香が掴んだ。

「ダメ、行ったら。何かが起こってる」

「あの声と音は——」

何も言わないで、スーザンの口に指先を当てて、黙るように合図

した。

再び射撃音と倒れる音が聞こえてくる。今度は人だろう。スーザンの身体が固くなっている。明日香はスーザンを下がらせて、ドアの前に行った。ゆつくりと息を吸って精神を落ち着かせた。足が小刻みに震えている。

明日香は拳銃を構えたままドアの隙間から外を覗いた。階段に殺到した客たちが銃を持った男に追いつ返されている。

銃声に混ざって、悲鳴と怒鳴り声が聞こえてくる。やはり英語だった。

中ホールを見ると、中央に向かって壁際に十人近い男が立っている。彼らの手には拳銃か、短機関銃が握られている。

明日香はクイーン、新崎の姿を探した。無事だ。その横にアンダーソン国務長官の姿も見える。

男たちの間から、床に数人の男が倒れているのが見えた。

こみ上げてきた悲鳴をなんとか呑み込んだ。倒れている男たちの中にはアンダーソン国務長官の警護官と新崎総理大臣の警護官もいる。高見沢の姿は――。探したが、見つからない。

明日香は拳銃を構えたまま身体の位置を変えていった。

倒れている男たちを数えた。アメリカの警護官が三名、日本の警護官が三名。何名かは無事なのか。洗面所の前を銃を持った男たち

が走っていく。

「何が起こってるの」

背後からの声にあわててドアを閉めた。

「銃を持った男たちが約二十名。総理と国務長官は無事。警護官は分からない。おそらく撃たれている。六名は確認した」

明日香は自分自身に確認するように呟いた。

「逃げましょう。ここにも彼らがやってくる」

洗面所を出ようとするスーザンの腕をつかんだ。

「どこに逃げるのよ。いま出ると捕まるだけ。様子を見ましょ」

自分でも冷静なのに驚いていた。足の震えも治まっている。

「壁の近くに寄るんだ。おとなしくしていれば危害は加えない。逃げ」

中ホールから英語と日本語の音が聞こえてくる。

明日香は洗面所の中を見回し、官邸内の図面を必死で思い出そうとした。やがて覚悟を決め、スーザンに洗面所に残るように言っ

ドアに向かった。

晩餐会が始まって、十分が経過していた。静かな音楽と歓談の声。

時折り遠慮がちな笑い声が混じる。落ち着いたいい食事会だ。

高見沢は明日香が中ホールを出て行くのを目で追った。

口から出るのは不満ばかりだが、あいつは良くやっている。今後は女性閣僚も増え、外国から来る要人にも女性が増えている。女性警護官がますます必要となるだろう。自分の考えも改める時期なのかもしれない。そうは思うが、やはり女には無理がある。いざとなるとどう反応するか。

明日香が女性初の、総理の本格的な警護官だ。警護官に失敗は許されない。二度目はないのだ。

高見沢は部屋を見渡した。客は三十二名。日本側は総理に閣僚が二名。外務大臣と経済産業大臣だ。アメリカ側は國務長官に随行官が五名。アメリカ大使に大使館関係者が五名。それに通訳がいる。あとは内輪の関係者だ。今夜、行われているのは非公式の小さな晩餐会である。

高見沢は目でホール内の従業員の数数を数えた。

ふっと違和感が脳裏をかすめた。晩餐会の規模にしては、ウェイトーの数が多すぎる。それに、初めて見る顔の者が多い。

高見沢は同僚の警護官の横に移動した。

「ウェイトーの数がいつもと違う。何か聞いているか」

「そういえばそうですね。この程度の会には多い。見かけない

者も何人かいます」

「やはりおかしい。本部に確認しろ」

そのとき、中ホールのドアが勢いよく開いた。

同時にスーツ姿の男たちが拳銃を構えて、ホールに駆け込んでくる。中には短機関銃を持っている者もいる。

高見沢は反射的に新崎総理のそばに駆け寄った。手には拳銃を握っている。

最初に銃を撃ったのはアメリカ国務長官付きの警護官だった。スーツの男が跳ね上がるように背後に倒れた。ほとんど同時に複数の方向から銃撃を受けた警護官が、テーブルにぶつかり床に崩れ落ちる。ホールには悲鳴と、陶器が砕け散る音が響き渡る。

しばらく銃撃が続いた。

高見沢は胸と腹に燃えるような痛みを感じ、弾き飛ばされた。

床に横たわったまま目を開けると、泣きそうな顔の新崎総理が見下ろしている。声を出そうとしたが出ない。

「シックレットサービスはもういないか。いたら銃を捨てて名乗り出ろ。命を取ろうとは思っていない。死ぬのは抵抗する奴だけだ」

男たちのうち、小柄な男が日本語で言う。横の大男が英語で繰り返した。アラブ系の男だ。

「あとで分かれば、そいつをかばった者も死ぬことになるぞ」

起き上がろうとしたとき、新崎総理がそれとなく唇に指を当てた。そのまま静かにしているという合図だ。横には外務大臣の警護官が倒れて、流れ出た血が高見沢の頭にかかっている。

再度、男の声が響いた。

「部屋を出るんだ。隣の部屋に移れ。急ぐんだ」

男たちは客たちを立たせて隣の大ホールに移っていく。

高見沢は自分の身体の状況を思い浮かべた。胸の痛みはかなり消えている。腹が焼けるように熱い。出血はかなり多いだろう。早く止血しなければと思うが、いまはどうすることもできない。

目だけを動かして辺りを見ると、十人近い男が倒れている。全員が日本とアメリカの警護官だ。

スーツの男たちが倒れている警護官から銃と弾倉だんそうを集めて回っている。時々響く銃声はまだ生きている者を射殺しているのか。高見沢はそつと頭を動かして顔に血を付けると目を閉じた。

男が近づき高見沢の手から銃を取り、腰の弾倉を抜き取った。銃を向ける気配がしたとき、怒鳴り声が聞こえる。

「こっちに来てスマホを集めるんだ。ボディチェックも忘れるな」

高見沢に銃を向けた男は、そのまま大ホールに移動していく。

身体に力を入れて動けるかどうかをたしかめた。動けないこともないが、走ることは無理だ。ドアの前には短機関銃を持った男が立

っている。しかし早く血を止めなければこのまま動けなくなる。

横たわったままドアのほうを見ていた。開け放たれたドアの外に、わずかに顔が見えた。明日香だ。自分を見ている。

〈逃げる、こつちに来るな。警護官は全員、射殺された〉

高見沢は念じるように心で呼びかけた。

明日香の様子が変わった。高見沢が撃たれているのに気付いたのか。

「大変。高見沢警部補が撃たれてる」

明日香はつぶやくような声を出した。

中ホールの床には十人以上の男が倒れている。総理と国務長官を含めた要人警護の警護官たちだ。侵入者たちは武器を持った、姜維となる警護官を殺害している。

三階のエントランスホールでも銃撃の音が聞こえた。

背後の物音に振り向くと、悲鳴を封じ込めるように口に手を当てたスーザンが立っている。

「洗面所に戻って。見つかったら殺される。すでに何人も撃たれて

る」

明日香は声押し殺して言った。

「二階にいる者は全員、大ホールに集める。キッチンにいる者もだ。

すべての部屋を調べるんだ。洗面所も忘れるな」

大ホールから英語の音が聞こえてくる。すぐに短機関銃を持った男たちが数名出てきた。外国人のグループだ。

「高見沢警部補を助けなきゃ。でも——」

明日香は中ホールに目をやった。高見沢のまわりの床には徐々に血が広がり始めている。明日香はスーザンの腕をつかんだ。

「行くのよ」

「行ってくつて、どこに行くのよ」

「彼らから逃げるの。見つからないところ」

「それがどこだか聞いているの」

明日香はスーザンの腕をつかんだまま後退した。

エレベーターのドアが開き、男が二人降りてくる。

官邸の三階、正面玄関からエントランスホールに入ると、左手に二つの階段がある。ひとつは大ホールと中ホールのある二階につながり、もうひとつは閣議室や特別応接室のある四階につながる。国民が見慣れているのは、組閣時に記念撮影が行われる二階から三階に上がる階段だ。

それ以外のフロア間の移動は基本的にエレベーターやエスカレーターが使われる。各フロアとも、エレベーターの扉前が受付になっている。各階の廊下につながるドアの前には守衛が立っている。ま

た扉はオートロックになっていて、鍵がなければ後戻りできない。

3

ハロルド・ライアンは大きく息を吸って、カバンの中の短機関銃を握り直した。

日本人のテロリスト、筒井が持ち込んでキッチンに隠していたものだ。

数十丁の銃器と数千発の弾丸、その他の武器をこうも簡単に、首相官邸に持ち込める国の保安体制はどうなっているのだ。ライアン自身も、渡された外国人記者証を使って簡単に入り込むことができた。

ライアンは腕時計に目をやり、周囲の男たちに目配せした。時間だ。

十人近い男たちが、一斉に短機関銃と拳銃を出して、中ホールに入ってしまった。

三階のエントランスホール、一階と地下にも武装した仲間が押し入っているはずだ。

「騒ぐな。反抗しない限りはみんな安全だ」

そう言いながら、アンダーソン国務長官の背後にいた警護官を射

殺した。

それを合図に、部下たちが壁際に立つ警護官たちに向けた銃を撃つていく。

警護官たちの反応も素早かった。ライアンが引き金を引くと同時に銃を出し、侵入者の一人を撃ったが、その警護官は数人からの銃撃を受けて、頭部を含めて全身から血を流して倒れている。即死の
状態だろう。

中ホールは銃声と悲鳴と怒号で騒然となった。

しかし数分後には不気味な静けさが漂っていた。恐怖と驚きがすべてを支配していた。静かな音楽だけが流れている。

青ざめた顔のステイブ・アレンが来て、震える声を出した。

「何をやってる。約束が違う。やむを得ない場合以外、血を流さない、殺さない約束だろう」

「それが何だ。彼らはプロだ。やらなければこっちがやられている」
ライアンは部下たちに指示を出しながら平然とした表情で言う。

この青臭い男は自分たちが何をやっているか、まったく理解していない。

警護官に撃たれた男がよろめきながら立ち上がった。テロリスト全員が防弾チョッキを付けているのだ。倒れている警護官を見ると、全員が頭を撃たれている。

「きみらのボスは、無駄な殺人はしないと決まっていた」

「どこが無駄な殺人だ。ここに倒れている奴らは全員が銃を持ち、殺しの訓練を受けたプロだ。それもとびきり優秀な殺しのプロだ。やらなきゃやられる。ここは戦場なんだ。あんたも十分に承知しておけ」

ライアンは銃口をアレンの額に当て強い口調で言う。

主導権は完全にアレンからライアンに移っている。

ライアンは中ホールの中央に集めた者たちに目を向けた。こんな男に構ってはいられない。やらなければならないことは山ほどある。スマホを耳に当てている日本の議員バッヂを付けた男に近づいて、スマホを取ると床に叩きつけた。男は青ざめた顔でライアンを見ている。ライアンは銃で男の顔を殴りつけた。顔が切れて血が噴き出してくる。

ライアンの部下がホールの壁際でアンテナを組み立て始めた。

「携帯電話の電波を妨害するポータブル機器だ」

箱型の装置の上部には、カニの脚のように何本ものアンテナが突き出ている。劇場やコンサートホールなどで携帯電話の使用を抑止するために市販されているもので、直径百メートルほどの範囲を「けんがい圏外」にする。各事業者の基地局が出すのと同じ周波数の強い電波を出すことで、携帯電話に基地局を勘違いさせるのだ。

「ここは狭すぎる。全員を大ホールに連れていけ。その前にスマホと携帯電話を出させるんだ。全部叩き壊せ。警護官の遺体は壁際に集めろ。その前に銃を集めておけ」

背後の日本人に視線を向けた。この筒井信雄のぶおという男は使える。武器の持ち込み、三十名近いライアンの部下も筒井の手配で入り込むことができた。自分と同年代か。いや、日本人は若く見えるから年上かも知れない。彼は七名の部下を連れてこの作戦に参加している。作戦遂行には日本人が欠かせない。

筒井が頷いて、一歩前に出た。

「現在、官邸内に電波障害を起こしている。あんたらのスマホと携帯電話は通じない。全員、持っている通信機器を出すんだ。それに、武器になりそうなものすべてだ。あとで持つてることが分かったら、命はないと思え。おとなしくしていれば危害は加えない」

ホールの隅に集まっている客たちに日本語で言うのと、部下の独りに英訳して全員に伝えるように指示した。

数分で三十以上のスマホが集められた。小型ナイフも二丁あった。ライアンの無線機が鳴り始めた。

「エントランスホールは制圧した。地下の警備室も占拠した。その他の階も隠れている者を探し出して集めている」

「二十七分か。予定より二分遅れている。急ぐんだ」

ホール中に聞こえるように、ライアンが大声を出した。

二十名ほどの男女が銃を持った男たちに連れて来られる。

残業で官邸内に残っていた者たちだ。他にもいるはずだが、どこに行った。

官邸内には通常、昼間は官房長官の他、三名の官房副長官、三名の副長官補、五名の総理大臣補佐官、五名の総理大臣秘書官、危機管理監、総務官、広報官、情報官などがいる。さらに、一般職公務員として、審議官、参事官、事務官など六百名以上が働いている。彼らの大部分が各府省からの出向者が占めるエリート集団だ。夜間はその十分に一以下に減るが、緊急時に備えてかなりの人数が残っている。

彼らの一部を含め五十名あまりの男女が、大ホールに連れていかれた。

そこは数百人規模のパーティもできるホールで、中二階にはオーケストラピットもある。

ライアンは通訳を連れて、新崎総理の前に行った。

「官邸は我々、極東イスラム戦線が占拠した。あんたらは我々の捕虜になった。我々の指示に従う限り、身の安全は保障する。しかし、不都合があれば連帯責任として、容赦はしない」

「要求は何です。私に言いなさい。私が外部と交渉します」

新崎総理が毅然きぜんとした口調で言う。

「総理の言葉は有り難いが、時間はある。我々は急いではいない」

「あなた方のターゲットは私でしょ。アンダーソン國務長官は放してあげて。たまたま今夜、ここにいただけ。関係ないでしょ。それに、他の人たちも。人質は私一人で十分よ」

「次の選挙じゃ圧勝に値する言葉だが、我々には関係ない。もうしばらく待ってくれ。ここを制圧することが第一だ」

時折りどこからか銃声が聞こえてくる。

他の階で銃撃戦が起こっているのだ。しかし、官邸内の警備員で銃を持っている者はいない。一方的に脅されているのか。それとも――。

明日香は必死で官邸内の凶面を思い出していた。テロリストたちは人質を大ホールに集めている。大ホールなら中央に集めれば監視がしやすい。オーケストラピットで見張れば一人でも可能だ。

高見沢はどうなっただろう。まだ中ホールか。私が見ているのに気づいていた。隠れている、彼は確かにそう言った。しかし、隠れてなどおれない。私は〈クイン〉付きの警護官だ。命を掛けて護る義務がある。そう言ったのは高見沢だ。

「電源を落とす。暗くなったら私が高見沢さんを助け出しに行く」

しかし、電源を切るにはどうすればいい。

「やめてよ。そんな危険なこと。私を一人にしないで」

「ブレイカーを落とすのがいちばんいいんだけど、地下にある。そこまでは行けない」

明日香は呟くように言った。

大ホールと中ホールの電気のスイッチさえ切れれば、高見沢のいる辺りは闇に包まれる。三十秒あれば、高見沢を中ホールから連れ出すことができる。

ホールの電気のスイッチは入口を入った所だ。気づかれずに行くことはできない。

「あなた、タバコを吸う？」

「今時、ワシントンの記者は、よほどのみ出し者か変わり者しか吸わない。でも、なんで聞くの」

「火災報知機を鳴らして、スプリンクラーを作動させたい。大混乱におちいる。その隙にホールの電気のスイッチを切る」

スーザンがバッグから寿司屋のロゴが入ったマッチを出した。富士山が印刷されている。

「昨日行った寿司店のもの。綺麗だからもらっておいた。アメリカじゃこんなのないもの」

明日香はマッチをポケットに入れた。

二人で洗面所を出て同じ二階にあるキッチンに行った。

明日香はコンロのガス栓をいっぱいに開けて回った。

「やめてよ。私たちも爆発に巻き込まれる」

「ガスが多くなければ大丈夫。爆風はやりすごせる。爆発が起これば消防署にも通報が行く」

明日香は火のついたキッチンペーパーをシンクに置くと、スーザンの腕をつかんで冷凍庫に入った。

「完全に閉まらないように気をつけるのよ。冷凍人間になりたくないかったらね」

つま先をドアの間に差し入れた。

爆発音が轟き、一瞬ドアが強く押された。爆発は大きなものではなく炎が瞬間的に広がるだけだ。火災報知機が作動してスプリンクラーから水が噴き出した。

二人は冷凍庫を出てキッチンから反対側の廊下に出た。

行き交う足音と怒鳴り声が響き渡り、二階は大混乱におちいつている。

二人はキッチンに走るテロリストたちをやりすごしながら、中ホールに向かった。

中ホールに入り高見沢の位置をまぶたに焼き付けると、ドアの横にある電気のスイッチを切った。

明日香は闇の中を一直線に高見沢の所に行った。

「夏目です。大丈夫ですか。意識はありますか」

明日香は高見沢に問いかけた。

肩に手を当てると、それを跳ね返すように高見沢が起き上がるろうとする。

「何をやった。爆発音がした」

「キッチンのスプリンクラーを作動させ、明かりのスイッチを切っただけです。急いでください。すぐに明かりがつかまります」

高見沢がテーブルの脚をつかんで身体を起こそうとしたが、力が入っていない。

倒れかけた高見沢の身体を明日香が支えたが、思わずよろめいた。思った以上に力がない。高見沢の傷は深そうだった。

「俺は無理だ。おまえ一人で逃げろ。外部と連絡を取って、助けを呼べ」

「どうやって逃げて、連絡するんです。私一人じゃ無理です。しつ

かり立ってください」

明日香は高見沢の肩を支えながら立ち上がった。身長一八八センチ、体重は一〇〇キロ近くある高見沢は重かった。身長は一〇センチ以上、体重は四〇キロ以上違う。

よろめきながらも明日香が助けて廊下に出ると、エレベーターが開いていた。中でスーザンが手招きしている。

男の怒鳴り声とともに、中ホールに明かりがついた。スイッチが切れているのに気づき、入れ直したのだ。

明日香は高見沢をうながし、歩みを速めた。

二人がエレベーターに乗り込むと同時にドアが閉まった。

明日香は反射的に三階のボタンを押した。エントランスホールがある階だ。

エレベーターが動き始めた。

「頭を撃たれたんですか。血まみれです」

「だったら即死だ。頭はかすただけだ。この血は森山もりやまのものだ。

俺の横で撃たれていた」

森山は外務大臣付きの警護官だ。明日香の四年先輩で優秀な警護官だった。

明日香はハンカチを出して、高見沢の足の傷を強く縛った。これで足の血は止まるだろうが、問題は腹だ。弾が残っていれば摘出てきしゆつは

早いほうがいい。

エレベーターのドアが開き始めたとき、スーザンが叫び声を封じ込めるように両手で口を覆った。

ドアの外には、十人以上の男が倒れているのが見えた。エレベーターの前にも二人が折り重なって倒れている。大半は制服を着た官邸警備職員だ。彼らは武器を持っていない者も殺している。

エントランスホールには、短機関銃を持ったスーツ姿の男たちが、慌ただしく行き来している。その数は十名以上。

スーザンが叩き付けるようにボタンを押してエレベーターのドアを閉じた。

「どこに行けばいいんですか」

「五階だ。総理執務室がある」

高見沢が答える。

「テロリストたちも必ず来ると思います。総理を人質に何かをやるつもりです。執務室がいちばん都合がいいでしょ。映像を送るにも、あの部屋には衛星電話やその他の通信設備があります。危険すぎます」

「だったら地下階だ。危機管理センターには数日なら籠城ろうじょうできる」
「ドアを破れることはないですか」

「できないこともないが、時間がかかる」

そんなことはない、出かかった言葉を呑み込んだ。あれは頑丈なドアだが、最近の高性能爆薬を使えば一瞬で開くことができる。それは高見沢の方がよく知っているはずだ。官邸はこういう場面を想定して作られてはいない。

官邸の地下階には、危機管理センターがある。

ここは内閣情報調査室のメンバー五班二十名が、二十四時間体制で運用を行っている。重大な事故や災害、テロに備えて警察庁、警視庁、消防庁、海上保安庁などのホットラインも設置されている。

通常、大規模災害や近隣諸国の軍事的な動きで招集され、「対策本部」が設置される。本部長は内閣総理大臣で、内閣危機管理監も置かれている。

首相以下、官房長官や担当大臣、有事であれば自衛隊の幕僚長らとともに、関係省庁スタッフを仕切るのが「内閣危機管理監」だ。内閣危機管理監は代々、警察庁の大物OBが起用される。

高見沢の手が地下のボタンに伸びたとき、明日香は四階のボタンを押した。

「四階は閣議室と応接室だ。テロリストが捜しに来たらすぐに発見される」

「警護官の待機室があります。そこに行きましょう。救急箱があり

ます。止血が必要です」

「俺はいい。なんとか二人で官邸から脱出しろ」

「総理と国務長官はどうするのです。私たちは警護官です。護る義務があります」

思わず出た言葉だが、脳裏には新崎の顔が浮かんでいた。気丈きじょうで暴力には屈しない方だ。それだけによけい心配だった。なんとしても、救い出したい。

明日香はスーザンに、様子を見てくる間、エレベーターのドアを開けて待っているように頼み、外に出た。

拳銃を構え、あたりを注意しながら廊下を歩いた。廊下も両側の部屋もひっそりとしている。この時間、かなりの数の職員が残っていたはずだが、すでに一階の大ホールに集められているのだ。テロリストたちもこの階にまで見張りを置いておく余裕はないのか。

明日香はエレベーターに戻った。

「見張りはいないようです。警護官の待機室に行きます」

「エレベーターは二階に戻しておけ」

部屋に入ると明日香は高見沢の傷の手当てをした。腹の銃弾は貫通している。胸に当たった銃弾は防弾チョッキで止まっていた。しかし、近距離からの被弾で、あばら骨が折れている可能性がある。かなり痛むらしく、少し動かすと顔をしかめている。

明日香の応急処置で腹の出血は何とか止まったが、またいつ出血が始まるか分からない。

「この階には誰もいなかったようだな。敵はさほどの大人数じゃない。二階と三階の占拠に人数を使って、四階、五階は人を割けないんだ。問題は地下だが、俺なら最も人員をかけた所だ」

「この階の職員は全員が連れ出されています。しかし、五階には総理執務室があります。いつ上がってくるか分かりません」

手当てが終わってから明日香はスマホを出した。圏外の表示が出ている。固定電話も回線が切られているらしく何も聞こえない。

「ここに閉じ込められました」

「中ホールでアンテナを組み立てていた。妨害電波を出しているのだろう」

明日香はため息をついてスマホをポケットにしまった。

「今ごろ、外じゃ大騒ぎでしょうね。日本じゃ、こんな事件は起こらないと思っていました」

「まったくなかったわけじゃない。数が少ないってだけだ」

高見沢は「金嬉老事件」と「三菱銀行人質事件」について言っているのだ。

二つとも劇場型人質事件で大いに騒がれた。

前者は、一九六八年、在日韓国人二世の金嬉老が、静岡のクラブ

で暴力団員二名を射殺、翌日温泉旅館に猟銃とダイナマイトで武装して、経営者および宿泊客十三名を人質に籠城した。八十八時間後に取り押さえられて逮捕され、その後韓国に強制送還されている。この事件を機に警察に狙撃隊が組織され、一九七〇年の瀬戸内シージャック事件で初出動した。

後者は、一九七九年、猟銃を持った梅川昭美うめかわあきよしが、大阪市の銀行で客と行員三十名以上を人質に立てこもった。梅川は警察官二名、支店長を含む行員二名を射殺した。大阪府警は半径一キロの道路を遮断し、事件発生から四十二時間後、後にS A Tの前身となる大阪府警察本部警備部の「零中隊」ゼロちゅうたいが行内に侵入、梅川を射殺した。

「今回が日本の史上最悪の人質事件だ。すでに二桁ふたけたの者が殺された」明日香は中ホールとエントランスホールに横たわる警護官たちを思い浮かべた。悪夢だ。一時間にも満たない時間で多数の警護官が殺されてしまった。全員が警護官としては優秀な者たちだ。

「なんとか外部と連絡は取れないか」

高見沢の呟きのような声が聞こえる。

「テロリストたちはどうやって外部と連絡を取るつもりでしょう。官邸の固定電話をつなげば連絡はできるんでしょうか」

「外では大混乱が起きているはずだ。国のトップが拉致されているんだからな」

「すでに対策本部が立ち上がり、官邸からのあらゆる電波の盗聴の準備はできているはずです」

「総理代理は副総理。梶元雄かじもとゆういちろう一郎か」

高見沢がかすかな息を吐いた。

「あの方、私は嫌いじゃありません。思いやりのあるいい人です」

「バカ野郎。国の指揮を執とる者の基準は、そんなもんじゃない」

高見沢は言いながらも顔をゆがめている。痛みがひどいのだ。

明日香の不安は膨ふくれ上がってくる。高見沢の傷は重い。動けば命取りになるだろう。自分一人で何ができるかを考えると消去項目の方が多い。

「占拠から一時間経過か。地下にある官邸警備室はすでに押さえられていて。テロリストのボスらしき男が話していた」

官邸警備室では官邸全体に取り付けられた監視カメラをモニターできる。さらに、各所に付けられている防火を兼ねた防犯ドアの開閉をコントロールできる。そうなると、これからはうかつに官邸内を歩けないし、外部からの侵入は難しくなる。

警備室の隣に武器庫があるがそこまでは行けそうにない。武器庫と言っても、さす股が数本に拳銃が何丁かあったただけだ。これがGDP世界三位の総理官邸の防護かと呆あきれた記憶がある。

日本では、基本的に公の施設の防護は警察がすると決まっている。

ことが起これば、外部から警察官が駆け付け制圧する。これが警察庁の考え方だ。

「総理執務室に衛星電話がある。あれなら外部に通じるかもしれない」

「警備室が占拠されているのなら、総理執務室に行くまでに見つかります。監視カメラをすべて破壊していきましょう」

「それこそ危険だ。彼らが見ていけば、その時点で飛んでくる」

「じゃ、どうすれば——」

明日香は言葉を止めて考え込んだ。

「死角を狙うしかない。監視カメラの位置は覚え込んでいるだろう」

高見沢は言うが、監視カメラは本来死角を作らないように設置してあるのだ。

救いになるのは監視カメラに比べてモニターの数が少ないことだ。常にすべてがモニターに映し出されているとは限らない。重要地点を優先的にモニターしているはずだ。それは二階と三階、そして地下階だと願うだけだ。

「部屋を移動しましょう。やはりここは危険です。すでに調べたあとであっても、いつ犯人たちが来てもおかしくない」

明日香の言葉に高見沢は考え込んでいる。

「この階の突き当たりに使われていない小部屋がある。現在はデス

クや椅子などの物置になっている。監視カメラから外してある」

「そんなことは聞いてません」

「カメラ設置時の警護班長の申し送り事項だ。もしもの時の保険だった。保険を使うことになるとはな」

「彼らが来ないうちに行きましょう」

明日香はスーザンに現状を説明した。スーザンは顔をこわばらせながらも、何度も頷きながら真剣な表情で聞いている。

二人で高見沢を支えて小部屋に移動した。

テーブルと椅子が雑然と積み上げられた二十平方メートルほどの部屋だ。

「私は何とかして、外部と連絡を取ります。電源を切れば彼らの妨害電波も切れるかもしれない。その隙にスマホが使えます」

「電源室は地下だ。メイン電源を切れば官邸内は全電源喪失だ。ただし、五分後には予備電源が作動する」

「五分あれば内部の情報を伝えることができます」

「伝える相手は横田警護課長だ。課長が現場の指揮を執っているはずだ。番号は分かるか」

明日香は頷いて、ドアを開けて外の様子をうかがった。

〈つづく〉